

D-25 住宅タイプ・居住階が子供の遊びに与える影響について  
 関西大学工 馬場昌子

目的 子供の遊びの場は、物理的環境条件や、親の態度によって影響をうけつつ、子供の発達段階に心じ、住戸内から、そのすぐ近く、近隣、地域社会へと広がってゆく。

本稿は、とりわけ、住宅タイプと住戸の高さ(居住階が)遊びの場所、頻度、相対、種類による遊び行動にどのような影響を与えているのかを知る事を主要な目的としている。

調査の方法と時期 3才～小学校6年生児童とその母親に対し、留置式アンケート調査を行った。時期は昭和54年10月23日～29日の一週間である。(29日のくもり以外晴天であった。)

住宅タイプ別年齢別有効回収数と回収率は表1に示す。

表1. 住宅タイプ	有効回収数	有効回収率
高層住宅(11階以上) (高層E1)	102	96.2%
中層住宅(1~5階) (階給アE2)	72	97.3
低層住宅(1,2階) (階給アE2)	69	90.8
独立住宅	75	98.7
計	318	95.8

結果 遊びの頻度について、「よく遊ぶ場所」、「きのう1日で遊んだ場所」、「各場所別遊びの頻度」の三つを総合してみると、住宅タイプ別では、高層及び独立住宅で「家の中」での遊びが相対的に目立つ。中層及び低層住宅で、「住棟ちかくの遊びが目立つ。遊ぶ場所を、戸外、半戸外(廊下、階段、バルコニー)、住戸内に分けて

みると、高層の戸外が低層、半戸外の高さが目立つ。居住階別にみると、高層住宅で、「廊下」での遊びが、3階以上で高くなるのが特徴的であり、親の意見をみても、高層階に住む親ほど、廊下や階段での遊びに寛大である。中層住宅においても、1,2階部と3階以上居住児童との間に、この遊び場所における頻度についても差がみられた。バルコニーについては、3才児の利用が少しみられるものの、ほとんど遊び場として利用されてはいない。